# 上海人も欧米崇拝病

孟　文蕾

日本人は金髪、青い目、英語を話す人が好きだという病状があるとして、欧米崇拝病という診断が在日外国人によって下されている。同じアジア人よりも欧米先進国の人たちを優遇しているというような意見がアジア系留学生の間では圧倒的に多い。不動産屋、ホームステイ先、留学生ためのパーティ、また大学で出会う日本人のまなざしの中にも、それが感じられるというのだ。そしてアジア留学生たちは、日本人が、欧米諸国・欧米人とアジア諸国・アジア人に対して差別的な対応をとることを強く批判している。帰国した中国留学生を対象にした対日イメージのアンケート[1]では、日本人にはアジア蔑視、欧米崇拝の態度があるという評価は六五%にも達している。

しかしながら、日本人ばかりをターゲットに批判してよいであろうか。このような欧米とアジアに対する序列をつけた対応の仕方は近代以後の世界的な「支配―従属」の歴史の中で培われたと私には思われて仕方がない。「先進」資本主義をモデルとして「近代化」を進める以上、こうした差別は避けられないのかもしれない。しかしこうしたかたちでの差別は、日本に固有のものではない。日本を先進資本主義国・近代国民国家のモデルと見なしながら、他方で差別には不満を感じるわれわれアジアの留学生は、偽りのないこころを持って、自国の事情にも目を向けて自覚するべきではないか。私の故郷、上海は社会主義国中国の市場経済の中での高度に発展した都会であるが、ここでも「欧米崇拝」病にかかりながら、それを自覚していない者が大勢いるのではないか。その病態を自覚的に観察する作業を通して、本質的な病因の究明を行ってみたい。

＊　＊　＊

何年か前までは、「ガーデンブリッジ」（外灘橋）や、「ブロードウェイ・マンション」（上海大厦）などの英語で名づけられていた建築物は上海のシンボルとなっていた。バンド（黄浦江から外灘）を眺めていると、どう見ても中国とは異質としか思えない十九世紀の西洋建築物がずらりと並んでいて、〝東洋のパリ〟という美称があってもおかしくないほどだ。

アヘン戦争による恥辱の南京条約は中国の歴史を大きく変える力

があった。この不平等条約のもとで、上海に設けれらた租界は、中国にあっても中国の主権の及ばない土地であったが、そのためにかえって上海が近代都市として急速に発展する条件を持つことになったということも一概には否定できない。特に欧米列強の力に中国が屈伏した状況における上海は、清朝の皇帝のもとに一元的に支配を受けていた時とは異質の全く新しい経済的・文化的な拠点として発展するようになった。その延長線にあるかのように、上海は今も活気に満ちていることでは香港返還以前の中国では唯一無二といえる特質を持っていた。世界中の新しい情報は首都北京よりも、この上海に集まると言われている。首都の北京が「政治の町」であるとすれば、上海は「経済の町」「情報の町」であった。中国の世界に開かれた窓といった方があたっているかもしれない。とくに開放政策がとられてからの上海の活力は、日に日に激しくなってきた。それで上海人は、自分たちの住んでいるこの町は中国の貿易、商工業の中心であり、西洋風国際都市としての自負とともに、全国総収入の三分の一以上は上海人の力によるという実績から、自分たちが中国経済を支えていると誇りに思っている。

欧米から押し寄せる「近代文明」によって、この大都会は中国の最大の窓口となった。経済面だけではなく、書物の翻訳、新聞や雑誌などの出版、学校教育など、近代の中国において目新しいものは、ほとんどすべて上海からはじまったといってもよいほどである。上海開港とともに渡来したイギリスの宣教師らは「西洋の学問によって中国の学問を広げ、西洋の新しい学問によって中国の旧学を刷新する」[11]という宗旨を標榜しながら、多くの啓蒙的書物の翻訳出版を行った。彼らによって、聖書の翻訳や、各種の自然科学書の翻訳、出版が進められた。また数多くの宣教師たちは「西洋の社会経済制度や、学術を中国に伝えるとともに、キリスト教信仰にもとづいた社会の改良と、人間性の改善を呼びかけ、近代的な知識を導入して中国を『文明化』することを使命としていた」[12]。そのような啓蒙活動は、十九世紀末に康有為らが起した変法自強にも大きな影響を与えたと見られる。

日本人の欧米は「上」、アジアは「下」という見方は、欧米の「先進」資本主義・近代国民国家をモデルとして急速な近代化・「脱亜入欧」を進め、さらに戦後はアメリカ従属の下で近代化を図ってきたという歴史の進行の中で、いわば宿命的に培われてきた心の構え方だと思われる。心理学者の岸田秀氏は、幕末の黒船侵攻以来の日本人を、西洋との関係について次のように分析している。

「日本は、決して開国したくなかったが、ペリー艦隊をおっぱらう武力はなく、不承不承アメリカの要求に屈せざるを得なかった。それ以来、日本は欧米諸国を崇拝し、欧米諸国に迎合し屈従する『外的自己』と日本の自尊と優越を求めて、欧米諸国を憎悪する『内的自己』とに分裂し、その分裂からまだ脱していない」。

日本は不承不承であるにせよ、自分の意志で開国したのに対して、中国が開国する契機となったのは列強の武力的な行動だった。その結果、中国近代史において屈辱的な南京条約により上海で共同租界がむりやりに作りあげられた。そしてこの共同租界は近代上海文化の原型を形づくった。イギリス、フランス、アメリカなどの欧米人はもちろんのこと、ロシアなどの東ヨーロッパ、中近東、アジア人も、ここに集まって一大国際都市を形成したのである。そして租界の中で、それぞれの文化圏といったものをつくるようになった。力の強さが文化の高さとなって表われ、そこに序列の意識が生じるのは必然といえるのであろう。租界の中に世界の各地域の人に対する階級格差が生まれたのである。

租界の序列の中で最上位にあったのは西ヨーロッパ人、アメリカ人（本文でのヨーロッパ人や、アメリカ人は白人のみを指している）であり、次は日本人、そして亡命ロシア人、中近東・アジア人（インド人のことを〝紅頭阿三〟という）といった序列が出来上がっていく。ここまでは、まだ〝人間〟である。最下位を占めたのが中国人で、これは人間あつかいさえされなかった。黄浦公園には、「犬と華人は入るべからず」などと書かれた立て札が立てられていたのである。差別される側には、差別される集団の一員であることを自ら否定するという心理的な要因が働いて、上海の中国人は、中国人であるというだけで恥じたのである。このような否定的な心理を抱いて生活する人々の行き着いた先は、現在の状態以上のより良い状態を空想することや、自分を差別している集団に自分を同一化しようという行動であった。上海人の夢は、最上位に位置する西ヨーロッパ人の真似をして少しでも彼らに近づきたい、というものであった。当時の上海に数多くいた「買辦（ばいべん）」というのは当時イギリスを中心とする外国商人のために現地の商人との仲介をする中国人のことで、彼らの大半は英語あるいはポルトガル語がたんのうであった。また租界の教会で英語教育を受けた〝エリート〟の中には、同じ中国人に向かって英語で話しかける「ガイジン・コンプレックス」患者[17]も少なくなかった。上海人の「假洋鬼子」（ニセ毛唐）という皮

肉な呼び名もここから生まれてきたのである。中国人といっても地方によりさまざまであるが、西洋への憧れが上海人ほど強い者はいないだろう。彼らは、外国のブランドであれば、何でもよいと思っている。アメリカ製などと言えば特に血眼になる。中国製のものでも〝这是合资的〟（これは合弁物だよ）、〝这个很洋派〟（これはとてもおしゃれ、舶来っぽい）などの勧誘に弱く、つい買ってしまうのだ。

皮肉なことに植民地時代、人間あつかいされなかったこれらの上海人は、中国の中で自分たちは一番上位にあるのだというプライドを当時も持ち、今なおそれがある。彼らはすべての上海以外の出身者を上海人ではないというだけで蔑むのである。結婚相手が上海戸籍を持っていないというだけの理由で親に反対されるのはありふれたことだ。また彼らは相手が誰であろうと、まず上海語で話しかける。普通話（標準語）で返事をしても、さらに上海語で質問する。『なんだおまえ、上海に住んでいて上海語ができないのか』と困らせることによって満足する。彼らは上海語を話さない者には本当に冷たい。三〇年代以後には、〝乡下人到上海，上海闲话（上海话）讲不来，眯西眯西炒咸菜〟というような外地からやってきたものを軽蔑する童謡が歌われたりした。要するにお上りさんが上海に来て、上海語が話せなくて、かわいそうに毎日腹の足しになるものは漬物しかない、と社会的地位の低い者を嘲笑する気持ちを表したものである。このようなひどい差別の意識や行動のある者が、日本人がアジア人を軽蔑するのが事実であるとしても、それに対する不満を堂々と言えるのだろうか。

＊　＊　＊

改革開放政策により、西洋文明は一九八〇年代から再び中国大陸に上陸した。映画館ではアメリカ映画が一番人気があり、町の広告には外国製の商品が主役となり、またそこに英語が欠かさずに登場している。大学のキャンパスではディスコダンスが中国の将来の大黒柱となるべき若いエリートたちを魅了する。人民服などの姿は上海の町から消えてしまい、人々の服装はおしゃれな西洋スタイルに変わってしまった。ミニスカートの好きな若い女性やロングヘアの若い男性の価値観は彼らの親たちとは全く違っている。彼らは常に西側に目を向けて少しでもアメリカなどの先進国と同じようなライフスタイルを真似しようとしている。このような変化が起きたのは強制されたためでは少しもない、西洋文明は密かに中国大陸で市民権を得ようとしているのだ。上海はいまや再びその最先端に立たさ

れている。特に九〇年代になって、町の看板やテレビのコマーシャルなどのマスメディアが侵入できるあらゆるところで、英語の使用は急速に目立つようになった。アイスクリームのハーゲンダッツの広告では〝Dedicated to Pleasure〟とともに〝この時代の最高の楽しみは、ニューヨークにあり、ロンドンにあり、パリにある。だから上海にあっても当然なこと〟という中国語が目に入ってくる。コカコーラの看板やデパートのショウウィンドを飾るアメリカの漫画や車にも、普通の中国人にとって訳のわからない英語で書かれた宣伝など上海の町の至る所で見られる。テレビやラジオの英会話番組も日に日に増えてきている。「英語を学ばないと時代に遅れる」、「英語は国際的に通用するから、どこへ行っても英語が必要だ」という緊迫感が上海の人々のこころを脅かす。そういう訳で上海の英会話ブーム、そしてアメリカンドリームなどの現象は日本に劣らないほど盛んである。

最近中国語と英語二つの言語を混合した「新しい言語」がオフィス街や若いエリートの間で流行っている。たとえば「我给你打电话」(私はあなたに電話をします)、最近よく聞くのは「我 call 依(你,上海方言)」。また、「这个男孩好帅」(この男の子は本当にカッコイイね)は「这个男孩好 nice」になってしまった。このようなステータスをアピールするような新しい言葉がほかにも数多く使われているし、これからはもっと増えていくと思われる。私は日本で勉学しているために、帰国すると新しい言葉についていけなくて、何回も「郷下人」(田舎者)扱いをされたことがあった。

なぜ上海人は英語力をつけることにこれほど夢中になるのであろうか。その一因として、言葉の知的価値があると思われる。われわれは「地球上のすべての言語は同等の価値を持つ」とよく授業で教えられている。これは確かに正論ではあるが、現実にはそうではないこともあるように思われる。日

本でも、英会話教師の時給は中国語や韓国語会話教師の時給よりはるかに高い。言語の「市場の原理」により〝自由主義経済のもとで、言語も需要と供給の法則に従って売買される。……ここでの原理は、通貨としての言語である。広く流通し、価値変動の少ない（できれば価値増大が見込まれる）通貨ほど喜ばれる。現代世界では一度はずみがつくと言語は雪だるま式に勢力を広げる。英語が典型である。たとえは悪いが、地域的勢力をつぶす点は、広域暴力団の勢力拡大とも通じる。〔v〕〟このように現代国際社会において、そもそも意味を伝達する手段としての言語が市場価値を持つようになってしまった。考えてみれば非常に不合理である。上海の「言語相場」においても、英語は一番価値のある言語だと言えるのである。求人広告では、給料の高いところは「英語がたんのうであることが好ましい」という条件がほとんどであり、英語教師は昼間は学校で働き、夜間に塾の英会話教師あるいは家庭教師をしたりして、ほかの科目の先生より何倍も稼ぐことができる。年功序列なども今では問題にならず、英語ができる若者の給料は何十年も一生懸命働いた親たちより十倍高いことも少なくない。このような上海の競争社会の激しさに私は帰国する度に驚かされる。過激なレベルにまで進んだ競争社会では、教育や職業の機会を得るため、つまり成功への扉を開くには、英語が何よりも必要なのである。

＊　＊　＊

欧米崇拝病、英語支配という現象は日本だけのものではない。上海人、いや、中国人も同病というべきであり、ほかのアジア諸国の人々もおそらく全く健康とは言えないのではないだろうか。それを認識した上で力を合わせてよい処方を検討しなければならない。そうでなければ、自らの病気を意識せず、他人の症状ばかりを追究するだけでは〝五十歩百歩〟と言われるばかりで、お互いにより人間らしい生き方に向かって一歩を踏み出すことはできないだろう。

〈i〉 徐光興『帰国した中国人留学生の対日イメージ、心理要因に関する研究』富士ゼロックス研究助成論文、一九九六年。
〈ii〉 並木頼壽・井上裕正『世界の歴史 中華帝国の危機』中央公論社、一九九七年、一三六頁。
〈iii〉 同右。
〈iv〉 津田幸男『英語支配の構造』第四章、英会話症候群（第三書館、一九九〇年）参照。
〈v〉 井上史雄「特集 ことばの経済学—ことば知的価値と情的価値」『言語』一九九三年一月号、大修館書店。

（名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士前期課程）